料無料で一般公開されており、信者以外の人たちも訪れることができる。二〇〇七年七月にはサンパウロの新聞『デアリオ・ヂ・サンパウロ』に「サンパウロの隠された七つの名所」と題して、それほど知られていない七つの施設や場所を紹介した記事が掲載された。環境保護区、植物園、ガラピランガ湖などとともに、救世教の聖地も選ばれている。

一方、救世教の聖地が位置するサンパウロ市パレリエイロスは、サンパウロ市最南端にあり、湖、滝、原生林等々の豊かな自然が残されている。同区は、二〇〇九年頃から同区の名所へのエコツアーを積極的に宣伝しているが、救世教の聖地もその対象とされている。なるほど、自然と人工が調和している救世教の聖地がエコツアー対象となっても不思議ではない。

このように、ガラピランガは行政の協力も得て観光地としての側面を持つに至っており、そこも訪れる非信者の数も増加してきている。非信者が聖地を観光地としてとらえて訪れることが救世教の信者の増加に直結している訳ではない。しかし、少なくとも救世教という宗教があり自然を重視した広大な聖地を持つているということを経世教の信者以外にも知らしめているのである。

聖なる観光地

——宗教ツーリズム論からみたパワースポット——

岡 本 亮 輔

パワースポットそれ自体は興味深い対象ではない。すでに指摘されている通り、パワースポットは二〇〇三〇代の働く女性がターゲットの女性誌を中心にしかけられ、二〇〇五年前後から急増したメディア主導のブームという性格が強い。パワースポットといわれる場所の多くは新たに発見されたわけでもない寺社で、情報だけが大量に供給・消費される「宗教情報ブーム」ともいえる。筑波山や御岳山のような伝統的宗教性をはらむ場所が自称するような状況も見られると同時に、築地市場や東京ジャーミイも金運や赦しのパワースポットとされている。要するに、パワースポットとは観光メディアで用いられるようになった「ラベル」であり、基本的にはどこにでも貼り付けることができるわけである。また、雑誌等でパワースポットとして取り沙汰されても、寺社側が好意的・積極的な反応を示すとも限らない。従来とは異なる参拝者のあり方に対する戸惑いも目立ち、「境内の一隅」にのみ関心を引きつけるようなパワースポット・ブームに対する神道界からの批判もある。

一方で、パワースポットをより広く「場所の(再)表象」として理解した場合、それは単に集客目的の商業主義としてだけでなく、「ある場所をめぐるイメージをどのように編集するか」という宗教ツーリズムの論件として浮上する。新たに発見

されたのではないにしても、忘れられていた場所や普通の場所が従来とは異なるイメージの中で聖地として訪れられる場合がある。本報告ではこのような「場所の表象戦略」という問題意識の下、「婚活の聖地」「恋愛の聖地」として全国区の知名度をもつ浅草の今戸神社の事例を検討する。

数年前の今戸神社は地域住民以外にはほとんど知られていない場所であったが、現在では、婚活系・恋愛系のパワースポットとして必ずとり上げられ、浅草地域のガイド本では必ず紹介されるようになってきている。実際、立地の悪さにもかかわらず、平日でも境内には多くの女性参拝客の姿がみられ、外国人の訪問者も少なくない。また数年前からは初詣に四〜五時間待ちの行列ができるようになってきている。本報告では今戸神社の表象戦略を次の七点にまとめた。①下町八社福参り・浅草名所七福神、②沖田総司終焉の地、③招き猫発祥の地・今戸焼発祥の地、④真円形の絵馬、⑤縁結び会、⑥活発なメディア発信と女性神職の活躍、⑦テレビ霊能者である。今戸神社はこれら新撰組、アニメ、スピリチュアリティ、婚活といった要素を積極的にとり込みながら、自社を全国区の知名度をもった宗教ツーリズムの対象へと高めてきたといえる。境内の飾り付け、招き猫のデフォルメ、女性神職の前面化などからは「神社空間の女性化」という傾向を指摘することもでき、自社をどのような聖地として見せるのかという点に強く配慮している様子がうかがえる。

これらの諸表象を神社側があえて語り見せようと意図する積極的表象戦略であるとすれば、他方で、語ろうとしない表象戦

略も見受けられる。今戸神社の地誌を検討すると、同社の宗教性は江戸期の弾左衛門囲内とそこで崇敬され昭和十二年に合祀された白山神社との隣接の重要性が浮かび上がってくる。

今戸神社は、一方では歴史・アニメの舞台訪問、婚活・恋愛成就、スピリチュアリティといったより現代的な流れと自社を積極的に結びつけている。こうした点を近視眼的にとり上げれば、ブームに乗ろうとする商業主義としかみえないかもしれない。だが、その地誌と歴史を検討してみると、これらは歴史的に密接に絡み合ってきた諸要素の意図的な取捨選択であり、より長期間に渡る場所イメージの再構成の一環としてとらえ返すことができるのである。

新しい巡礼の創出

——長崎カトリック教会群の世界遺産化——

山中 弘

本稿の目的は、長崎カトリック教会群の世界遺産化の準備に向けた動きの中で登場した、「ながさき巡礼」という観光商品と「五島巡礼」という新しい巡礼形態を紹介しつつ、そこに看取されるカトリック長崎大司教区と観光セクターとの間のせめぎ合いを、「長崎巡礼センター」の活動を中心に検討してみたい。

二〇〇七年「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」国内暫定リスト記載を受けて、長崎観光連盟は、「新しい旅の創造」と